

大口径包皮粘膜膀胱瘻設置術を行った犬の1例

桑原 康人 Yasuhito KUWAHARA ¹⁾、石野 明美 Akemi ISHINO ¹⁾、桑原 典枝 Norie KUWAHARA ¹⁾

前立腺嚢胞により尿閉に陥った雄犬に、大口径包皮粘膜膀胱瘻設置術を実施したところ順調に推移し、この術式の有用性が示唆された。

Keywords: 犬、前立腺嚢胞、大口径包皮粘膜膀胱瘻設置術

はじめに

腹壁膀胱瘻設置術は尿路系腫瘍や外傷によって近位尿道閉塞に陥った症例や、神経障害で尿道閉塞や膀胱麻痺に陥った症例に対して尿排出路を確保するための処置として実施されてきた。しかし腹壁に直径1～2cmほどの膀胱瘻を作成し、オムツをして管理するか、瘻孔にバルーンカテーテル留置して管理する従来の方法の場合、瘻孔の狭小化、細菌性膀胱炎、さらには腎盂腎炎が起き、膀胱瘻を長期間維持することが難しいのが現状であった。我々は腹壁膀胱瘻設置術後の膀胱炎は、膀胱に尿が貯留し、そこへ細菌が瘻孔から上行感染して細菌性膀胱炎を起こすことによって起こると考え、膀胱に尿が貯留せず一方方向に常に尿が流れるように、より大きな口径の膀胱瘻を作ること(大口径腹壁膀胱瘻設置術)を試みている。今回、雄犬限定であるが、術式をさらに改良した大口径包皮粘膜膀胱瘻設置術を実施したところ、術後管理がより良好になったので報告する。

症 例

柴犬、去勢雄、13歳齢、体重16kg。7年前に他院にて前立腺肥大の診断のもと去勢手術を実施。その1ヵ月後より断続的な排尿困難が認められ、その都度、カテーテル導尿とプラゾシンの投与で対処。5年前、持続的な尿閉状態になり大学病院を受診し、抗生物質と猪苓湯の投与で一時改善。その1ヵ月後、再度、持続的な尿閉状態になり、その時に行ったカテーテルバイオペシーでは明らかな異形細胞は認められず、超音波所見から前立腺嚢胞と診断され、尿道ステント留置術対象症例として当院へ紹介され来院した。しかし、当院では最近尿道ステント留置術をあまり推奨しておらず、代わりに尿道バルーン拡張術を提案し、実施したところ排尿可能となった。

その後2年間は順調に排尿していたが、3年前より断続的に排尿困難が認められ、最近は週に2回カテーテル導

尿して対処しているとのことであった。しかし、今回、主治医が入院することになり、その処置ができなくなったため、再度、尿道バルーン拡張術を希望して当院を来院した。前回と同様の尿道バルーン拡張術を実施したところ、術直後は排尿可能になったが、翌日より排尿困難になった。よって大口径包皮粘膜膀胱瘻設置術を提案し、同意が得られたので実施した。

術 式: まずは大口径腹壁膀胱瘻設置術について述べるが、この術式を試みた最初の症例では、大口径の膀胱瘻を作るために膀胱全長を切開して腹壁膀胱瘻を設置した。しかし、それだと翌日には膀胱が反転して脱出してしまった。よって現在は、膀胱全長の約2分の1の長さの膀胱を切開して膀胱瘻を作り、その上から膀胱の反転を防ぐために2か所糸をかけて、この2か所の糸は2週間後に抜糸するようにしている(図1)。術後はオムツをして管理している。この方法で現在までに猫3例、雌犬3例に膀胱瘻を作り良好に推移しているが、今回の症例は雄犬であり下腹部中央に陰茎が存在し、正中線上に瘻口を作成できないため、新しい術式である大口径包皮粘膜膀胱瘻設置術を試みた。新しい術式では膀胱全長の約8分の3の膀胱切開口を正中線腹膜に開口固定した後(図2)、陰茎腹側の包皮を縦切開し(図3)、陰茎を横によけて、包皮背側に切開を加え、その切開創を正中線腹膜に開口固定した膀胱瘻に全周縫合した(図4)。次いで陰茎を図5のように元に戻し、図6のように包皮内と皮下に1本ずつドレーンを置いて包皮および表皮を元通りに縫合し手術を完遂した。皮下ドレーンは翌日に抜去したが、一端を包皮口から出した包皮内ドレーンは一週間後に抜去した。包皮内ドレーンを設置しなかった症例で、包皮口が癒着して包皮内に尿が貯留したことがある。

術後経過: 手術の結果、尿は膀胱に溜まることなく、包皮先端から常ににじみ出るようになり、現在、本症例はオムツまたはマナーベルトで管理し、順調に推移している。

考 察

本症例に行った大口径包皮粘膜膀胱瘻設置術は、もう1例、原因不明の近位尿道閉塞に陥った雄犬にも実施している。その症例も本症例も本術式実施後は順調に推移し、術後管理も雌犬に対する大口径腹壁膀胱瘻設置術と同等か、もしくはそれ以上に良好であった。このことから尿道閉塞や膀胱麻痺に陥った雄犬に対する大口径包皮粘膜膀胱瘻設置術は、尿路を確保するための処置の1つとして有効であると考えられた。

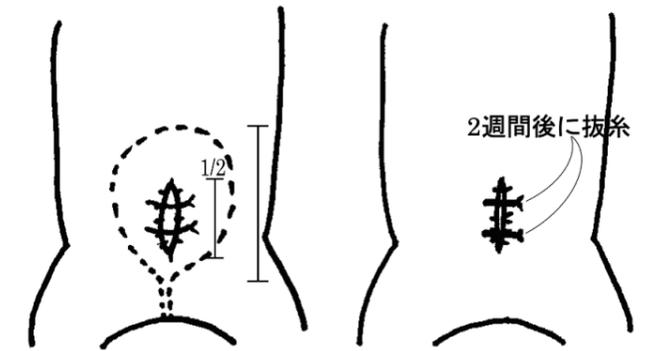


図1. 大口径腹壁膀胱瘻設置術の術式

[第IV会場
表紙に戻る](#)

[前の抄録](#)



[次の抄録](#)



図2



図3



図4



図5



図6

図2. 膀胱切開口の正中線腹膜への開口固定

図3. 縦切開した包皮

図4. 包皮内の膀胱瘻

図5. 陰茎を元に戻したところ

図6. 手術終了時外観